

臨床解剖学の新たな知見

整形外科の新しい術式が開発されるのは、多くの場合、解剖学的に新たな知見や認識が生まれたことに基づいている。さらに近年は器具や技術の発達に伴い、損傷部位の解剖学的な修復のみならず、骨の動きや靱帯の張力復元まで考慮に入れた再建が行われている。そのような意味で整形外科には解剖学だけでなく、バイオメカニクスの知識も必要であると思える。筆者の属していた札幌医科大学の解剖学講座では、全国的に先駆けて未固定遺体（ホルマリン固定をせずに冷凍保存した遺体）を用いたバイオメカニクス実験を行っていた。そのため、全国から多くの整形外科医が研究しに來られ、様々な方々と知り合う機会が生まれた。今回の特集は、この時知り合った方々を中心に脊柱、肩、肘、手、股、膝、足という主要な関節について基礎的であるが重要な解剖学的・バイオメカニクスの研究を行ってきた先生方に寄稿をお願いした。

脊椎の解剖では東野先生に、腰神経と靱帯の構造を中心に書いていただいた。肩の解剖では村木先生に肩峰下インピンジメントのメカニズムと後療法的重要性を中心に書いていただいた。肘の解剖では、大歳先生に肘の靱帯構造について臨床症状とからめて明快な解説をしていただいた。手の解剖については片岡先生に、遠位橈尺関節不安定症について、掌側橈尺靱帯の解剖学的な解説、バイオメカニクスの検証、臨床応用という一貫した流れで解説していただいた。

股関節では伊藤先生が、人工股関節置換術（THA）における関節包や短外旋筋群の温存の有用性について解説し、各アプローチによる THA システムの選択に重要な示唆を与えていただいた。膝の解剖では前十字靱帯（ACL）について大坪先生に解説していただいた。ACL は膨大な研究がなされ、逆に理解しがたくなっている面もあるが、ここでは解剖学的構造や機能について明快な解説をしていただいた。足首の解剖では寺本先生に損傷例の多い前距腓靱帯（ATFL）を始めとする外側靱帯について、従来の術式の問題点と今後の改良点について貴重な所見を解説していただいた。

札幌医科大学の解剖学教室がバイオメカニクス研究室を立ち上げた時に比べ、現在では多くの施設で未固定遺体を使用した研究が可能になり、様々な研究が行われるようになってきた。各部位の臨床解剖学の知見を確認するだけでなく、今後このような解剖学的研究を行っていこうと考えている方々の参考になれば幸いである。

（鈴木大輔）